写真１　後期（2世紀ごろ）の土器（鴨都波遺跡出土）

ふるさと御所 文化財探訪

⌘其の九⌘

弥生時代〈5〉
道具❷ 土器

生涯学習課文化財係
☎内線６９６

自動車など、同じ車種であっても製造された時期によりそれぞれに型が変わっていきます。古いものから順に最新のモデルまで並べてみると、変化に方向性を見て取ることができます。このことにより、それぞれの型の先後関係を一定程度認識することができるわけで、考古学の場合にはこの認識を、土層の上下関係や遺構の先後関係によって検証し、時期ごとに遺物などの先後関係を決定して、編年がなされています。

この際に時間の物差しとして最も有用なのは土器です。これは土器の材料が粘土であるために、形状や文様の流行といった時代背景や、凝りあるいは飽きといった心理状況が土器製作にあたって鋭敏に反映することによります。

弥生土器の場合には、用途により貯蔵形態としての壺、煮沸形態としての甕、供餐（お供え用、盛りつけ用または食事用）形態としての高坏・鉢などに機能分化がなされており（**写真１**）、それぞれに地域や時期によって形状や文様などが変化していきます。奈良県域の弥生土器の場合には、16以上もの時期別の様式に細分されていて、その変化すべてをここで述べることは不可能ですので、その変化の一端を壺などの表面を飾る文様によって見ておきたいと思います。

写真２　ヘラ描沈線文

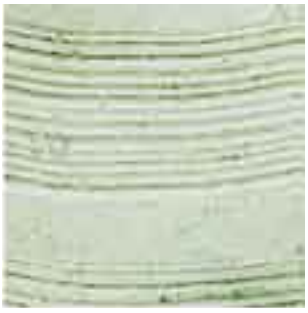

写真３　櫛描直線文

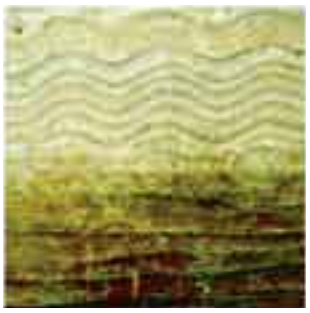

写真４　櫛描波状文

写真５　櫛描簾状文

写真６　櫛描簾状文＋貼付突帯

（写真はいずれも鴨都波遺跡出土土器）

写真２は、前期末（紀元前３世紀ごろ）の壺の肩部分に施されたヘラ描沈線文と呼ばれる文様です。この場合のヘラとは、先を尖らせた棒あるいはヘラ状の文様原体のことを指し、線は１本ずつ引かれるので２本の線は平行にはなっていません。

中期に入る（紀元前２世紀ごろ）と、板の先端をギザギザに加工した櫛状原体が考案され、紀元前１世紀ごろまでには土器を乗せる回転台が登場することとも相まって、美しい多条の平行線（櫛描直線文＝**写真３**）が一度に引けるようになります。この原体を上下に動かしつつ線を引くと波打ったような櫛描波状文（**写真４**）と呼ばれる文様が、また、回転を細かく止めて原体をその度に器面に押し当てるとスダレのような櫛描簾状文（**写真５**）と呼ばれる文様が施文されます。**写真６**は、その上にさらに粘土帯を貼り付けたものです。

この時期の弥生土器は最も美しく飾られますが、これをピークとして次第に無文化が進み、ほとんど文様を施さない後期（２～３世紀）の土器（**写真１**）へと至ります。

製作時に土器に付いた指跡（ときには指紋も残っている）や施文の方向などを観察すると、右利きの女性が弥生土器作りに従事することが多かったことが分かり、土器の破片一つ一つから弥生人の息吹が感じられるようです。